

ブータンの保育園事情と タイでの子育てエピソード

太田幸輔

(教育活動家)

大学を卒業してからさまざまな国に教育分野でかかわってきましたが、その中でも特にかかわりの強かった国であるブータンの保育園事情、そして長男を出産したタイにまつわるエピソードの一端をご紹介します。

ブータンの保育園事情

私がブータンに初めて降り立ったのは2009年。ブータンの地方公立校で体育教師を2年間務めました。その頃は王制から民主主義を基本とする立憲君主制になったばかりという変革期でしたが、海外からさまざまなものが入ってくるわけではなく、こと教育においても外資

系の学校の進出等もほとんどありませんでした。そんなブータンは、実は義務教育という概念がないため、入学時の年齢が異なります。当時、私が教えていた一番下のクラスにも、4歳で入学した子もいれば、10歳で入学してきた子もいました。自給自足で生きているブータン人も多くいたので、学校に入学させない家庭もあれば下の子の世話をさせてから学校に入れる家庭もあるなど、まだまだ緩やかな時代でした。

再訪した2017～19年。全人口の10%以上の人々が首都ティンブーに集まるという首都集中が起きていました。その理由は「地方に職がない」ということでした。失業率も10%を

太田幸輔（おおた こうすけ）

大学を卒業後、教師としてブータンやタイに滞在。帰国後は子育てに専念するため主夫期間を設けた。現在、島根県津和野町の教育を魅力あるものにすべく活動中。

上回る社会現象となり、それはコロナ渦の今でも変わっていないとのことです。また、民主化以降インターネットが解禁となった時代を過ごした子どもたちが成人となり、自給自足や農業従事ではなく、華やかな仕事や外への憧れを抱くようになっていくことも背景のひとつです。物価は高騰しているにもかかわらず上がらない賃金のため、両親が共働きしないと生きていけない世帯が増えました。そのため、ティンプー市内において保育園の需要が高まり、保育園が乱立している状態でした(元々ブータンに「保育園」という概念はなく、高所得層向けのプレスクールが存在する程度でした)。

そのような状態なので、保育士免許をもっている人もほとんどおらず、子どもたちを預かってはいるものの、ほとんどの時間を室内で過ごしたり、一日中テレビを観せたりしているだけの園もあるそうです。一方で、保育内容が充実した私立保育園もありますが、高い学費の問題などで高所得者やブータンで働いている外国人

家族の子どもたちが通う場となっています。

現在でも、各省庁内に職員の子ども用保育園が創設されるなど保育園の需要は高まる一方だそうです。しかしながらブータンの平均月収の4分の1程度が保育料という園が多く、家計を圧迫する要因にもなっています。ただ、実際に私が訪問した園では、園長自らが近隣のインドで勉強をして戻り、自園の先生たちに教授しながら、園での生活を展開していました。そのようにして保育の質を高めていこうという機運も見られています。これからのブータンにおける幼児の保育・福祉のあり方について国としてどう対応していくのか、これからも見守っていきたいと思います。

タイでの子育て生活

タイに住んでいた2014〜17年。政権転覆を狙ったクーデターが起こり、さらにはプミポン前国王の崩御という激動の時代の中、2016年に私たちは待望の第一子を授かりました。

当時、首都のバンコクから車で約3時間離れたシラチャという町に住んでいた私と妻は、現地人が住むコンドミニアムに入居したことでたくさんタイ人の友人ができました。その中でも、家族と呼べるほどの付き合いをしているノイさん一家との出会いに恵まりました。

妻が妊娠しているときのことです。ある日、ノイさんがわが家を訪れました。大きな袋を部屋の中にどんどん入れているので中身は何だろうとのぞいてみると、その中には大量のココナッツが入っていました。不思議に思いノイさんに聞いてみると、「妊婦がココナッツを飲むと、透き通ったきれいな肌の赤ちゃんが生まれてくるんだよ」と言われました。タイならではの話だなあと思いつつ、その日から妻はココナッツを日々飲むようにしました。割るのは私の役目で、気がつけば職人のようにココナッツを割れるようになり、日本にいては身に付かない技術を習得することができたのも良い思い出です。そうした日々を過ごして、ついに出産。本当

にわが子の肌が透き通るような白さで驚きました。余談ですが、タイ人は妊婦健診の際必ずといっていいほど父親も同伴していました。日本で第二子、第三子を出産した際、連れ立っている父親の数の少なさに啞然としたことも明記しておきます。

このようにして、初めての子育ての地がタイとなった私たちですが、タイ人の、小さい子どもに対しての優しさも忘れることができません。首都バンコクで買い物をするのに電車を利用したときのことです。私たちが車内に入ると同時に、座っている人が一人二人と席を立って、座席に向かって指を指し始めました。これは「ここに座っていいよ」という合図なのです。妊娠中もそうでしたが、小さな子どもを連れている家族に対して非常に愛情深く接してくれます。座れば隣の人が「ジャッエ」（タイ版のいないないばあ）とあやし始めてくれるので、わが子はたくさんの方々と接する機会をもつことができました。また、ご飯を食べるにお店に行くと、

毎度のように「抱っこしてもいいですか?」と店員さんが尋ねてきます。そして「その間にご飯食べちゃってね!」と言い残して厨房まで連れて行ってしまふ……とてもありがたい時間をつくってくれるのです。付け加えて彼、彼女らのすごいところは、子どもが泣いても全く動じないことです。泣くことは当たり前、といった感覚なので、泣いてもすぐに我々の元に戻ってきません。むしろ、こちらが気になってしまい、様子を見に厨房の中まで行くぐらいでした。

そのような生活を続けてわかったことは、タイでは若者でも子どもの抱っこの仕方、あやし方がとても上手ということでした。これは、日頃からタイ人は家族を大切に、きょうだいや子どもの世話をしあげていることが要因なのだと思えます。日本に帰国して以来、お店に入っ「抱っこしてもいいですか?」と言われたことはほぼなく、むしろかわりを避けられることのほうが多い印象です。これは国民性なのかもしれませんが、子どものための居場所づく

りや何かを与えたりすることよりも、生活する中でのかわり方を変えることで、子どもたちにたくさんのお会いやきつかけ、コミュニケーションを与えることができるのではないかと強く感じます。

現在私は、男子3人という子宝に恵まれ、義務教育だけに頼らない「0歳児からのひとつづくり」、学校だけではなく「町全体を学びの場」にするべく、教育魅力化コーディネーターとして島根県津和野町で活動しています。妊婦さんや乳児連れの保護者さん、将来親となる高校生をはじめとした若者を巻き込んだ学びプロジェクトを進めている最中です。ご関心をもたれた方は、ぜひご連絡いただけたら幸いです。



<https://www.facebook.com/kosuke.ata/>